

10代の母という 生き方 ⑥

大川 聡子

★まえがき

前々号（マガジン 14号）から若年母親へのインタビューを基に、若年母親が出産を主体的に選択していく過程と、その背景にある社会的特徴について分析しています。対象者の概要、研究の背景につきましてはマガジン 14号をご参照ください。本号においても、出産後の母親たちがおかれていた状況を中心に記述し、その内容から若年出産の背景について考察していきます。

第4項 母親になるための努力

(1) 【母親自身の努力】

① 《活発な性格》

若年母親達は活発な性格であることが多く、問題に直面した場合にも一人で悩むのではなく、その時に応じて様々な人を頼り、また自分でもネットワークを広げて同年代の母親とつながる力を持っていました。

〈横のつながりを作り出す力〉

若年母親は様々な場所で同世代の母親を見つけ、友人になります。このような同世代母親同士のつながりの広さは特徴的であり、母親たちの活発な性格に起因するところが大きいと感じました。また、周囲に同世代の母親が少なく、友人が欲しいと感じた若年母親は、ホームページやサークルを作り、運営することで友人の輪を広げていました。

Jさん 私ほんとにもう周りに友達がなくて、妊婦の。友達が欲しくて？でそういうママ友が欲しくて作ったみたいなどこあるし、他の人にも、私のホームページ 10代の人から 20代前半の人のやつなんですけど、若いママ達が集まって友達作ったり一、お話できたりするようなどこ作りたいなーとか思って、作った。

②《旺盛な自立心》

〈必要以上に他人を頼らない〉

若年母親は自立心が強く、育児においても必要以上に他人を頼らず、自分で何でもしようという傾向が強くみられました。母親たちは年齢相応の遊びを我慢しても、母親役割を全うしようとしていました。

Eさん うちはこの子産んでから1回もこの子と離れたことがない。(略)自分が産みたくて産んでんねんから、そんなよっぽどの用事じゃない限り、普通預けて遊びに行くってことはないやろうって思う。遊びたいっていう考え自体が、じゃあ子ども産むなよってなっちゃうでしょ。

(2)【母親となることでの社会化】

①《生活設計を構築する試み》

〈生活習慣を変える〉

若年母親は、母親となったことであらゆる面で変化したと言います。「規則正しい生活を送るようになった」、「しっかりするようになった」、また夫から、「(本人が)しっかりしてきた」という意見や、夫の母親から、「子どもを産むことによって大人になった」という意見もありました。このように子どもを産み母となることで、生活習慣や生活態度を若年母親自身が考える、母親として適切なものに改めようと努力しています。

〈生活設計を立てる〉

母親となったことで長期的な視点を持ち、自分の生活設計を計画的に組み立てている人もいました。

Gさん 不自由なく生活させてやんのが私の目標やねん。不自由なく。(略)大学まで出して・・・頑張らなあかんねん私。あと20年くらい。

②《母親としての自分を評価する》

〈母親として生きること自信を持つ〉

若年母親は子どもの成長とともに母親として成長し、子どもの成長が母親としての自信につながっています。「初めは育児が大変だったけど、(ある程度大きくなって)もうそれが

ふつうになってきたので楽」といった発言や、また、夫の母親からは「子どもが笑うようになってから(Cさんは)変わった、楽しそうになった」という発言がありました。子どもを育てた自信から、金銭的余裕があればもっと子どもを産みたいと言う人もいました。

仕事を持ち、父母双方の実家の支援を受けている Gさんは、大学に行くよりも子育てをしている現在の人生の方が向いていると言ひ、大学に行った同級生が話す内容を子どものように感じると言ひます。

Gさん だから私向いてるって、子育てに。向いてるって、今の人生のほうが。

筆者 大学行ったりするより？

Gさん 無意味やったと思う、私が大学行ってたら。で、今度みんなが産むころになったら私楽やん。なんかもう。こう、高見の見物したろかなあって。遊びまくったろかなーと思って、私。(略)

筆者 (同級生は)大学4年生くらいでしょ？

Gさん うん。それ見てたら、あー私楽やなあって。勉強もテストもないし楽やなあ。みんな言ってることがお子ちゃまに聞こえんねんもん。若いなあーって。話も合わへんし、(略)ナンパとかそんなんばっかして、女の話ばっか。今だに結構遊ぶねんか、そんな時になんか、ちゃらけとんなーって。

〈母親であり続けることの努力を評価する〉

周囲から「若いのによく頑張った」と言われることにより、改めて自分自身の努力を見つめなおしている人もいました。また、「自分だけでなく、どのお母さんも頑張った」と周囲の母親に対して評価する発言もありました。

第3節 考察

若年出産は「望まない妊娠」問題として構築されていますが、佐藤(2005)が、意図的に若年出産する女性が増えつつあることを指摘しているように、本調査でも、〈子どもが欲しかった〉と考え、出産を自らの意思で主体的に選択する母親がみられました。また、若いゆえに親達から結婚を許されないと予想しており、〈結婚するための妊娠〉をしている母親もいました。Montgomery (2002)の調査では、若年母親が出産した理由について「責任感を持ち、より成長するため」「ボーイフレンドと新たな関係を築くため」を挙げています。こうした理由による妊娠は、いわゆる「望まない妊娠」には当てはまらないでしょう。避妊を実行しなかったことにより妊娠した人も多いのですが、この理由として Hさんは、〈結婚するための妊娠〉において「何もすることなかったし、結婚しよう」と話しています。就学や就労している年齢にある10代の女性達がなぜ、「何もすることがない」と言う思いを持ったのでしょうか。

〈短い修学年数〉で示したように、若年母親の多くは高校を中退していますが、妊娠を

機に退学をしたのではなく、妊娠前から高校に進学して勉強することにそれほど関心を持っていませんでした。家族も高校進学に迷う子どもの進路に向き合う余裕がありません。高校中退後就労した仕事も、接客業や内職等〈不安定な就労〉であり、産後もキャリアを継続することは難しい状況です。Willis(1985)は、「職業の意識的な選択ということ自体が、本質において、非常に中産階級的な発想なのだ」といいます。妊娠前の若年母親達も仕事を選べる状況になく、できる仕事をせざるを得ず、そこでやりがいや生きがいを見つけることは難しいです。こうした状況の下、〈母子を養うことができる夫〉と知り合い交際を始めます。交際している中で、避妊をせず妊娠したとしても、夫と新しい家族を作ることに希望を持ち、母親になることを消極的に「選択」しているとも考えられるでしょう。

こうした、消極的あるいは積極的に母親になることを希望している若年女性に対して性教育を推し進めても、若年出産が減少することはないでしょう。それよりも、若年母親が出産前に持つ社会的不利な特徴の一つ一つを取り除くことの方が必要ではないでしょうか。

出産後の母親は、妊娠前と比較してさらに【社会的不利の顕在化】が進んでいきます。出産後就労希望を持っていても、昨今の保育所待機児童数の増加から、就労を希望しているという段階で子どもを保育所に入れることは難しく、乳幼児を育てながら職業訓練を受けることはさらに困難な状況です。〈選べない仕事〉で示したように、乳幼児がいることでアルバイトでさえも採用されないという現状もあります。夫である父親も収入が高いとは言えず、若年出産家族は〈経済的困難〉を抱え、〈住環境の不備〉の中で生活をせざるを得ません。さらに、〈子どもとの関わり方がわからない〉といった不安や、〈世代間連鎖からの離脱〉といった《子育てへのプレッシャー》を抱えながら育児をしていくこととなります。

〈世代間連鎖からの離脱〉について、Lipper (2003)は、若年母親の中に、母親自身の挫折した願いや夢や野心を子どもに投影する者もいたといえます。本章においても、子どもに自分の果たせなかった学歴や母親との信頼関係の構築などを求め、子どもとの関わりの中で、母親としての育ち直しを行なおうとしている様子が見られました。しかし、子ども自身はこうした母親からの期待をどのように受け止めて成長していくのか、母親自身が現状と子どもへの期待をどのように折り合いをつけていくのかは、今後の課題として残ります。

周囲の人々は若年出産した母親達の実態を知ることなく、〈トラブルを若年母親特有の問題とみなし〉、〈児童虐待問題と関連付けられる〉、といった《周囲との軋轢》も抱えることとなります。SmithBattle(2007)は、社会の若年母親に対する蔑視は、幼少期の不利な状況の遺物からもたらされた負の結果であるという根拠があるにもかかわらず、尾を引いているといえます。日本においても、若年母親の社会的不利な背景には注視されず、若年母親であることそのものが「問題」として認識され、偏見の対象となっていることがうかがえます。

また若年母親は、〈アウトサイダーであるという自己認識〉を持ち、自らを一般的な母親という枠に入れられない別種の母親であると感じ、若年母親であることを再認識していました。栗岡(2001)は、「主体があるカテゴリーに自らを位置付けているとすれば、そこには彼の状況に対する全体的な認識が現れている」といいます。若年母親は自らがアウトサイダーで

あることを自覚し、若年母親とそれ以外の母親を意識的に区別し、その輪の中に入ること
を躊躇しています。それが〈年長の母親集団からの孤立〉につながっていました。

《インフォーマルサポートの有無》では、こうした母親達をサポートする、家族、親戚、
友人などの支援が示されました。夫の多くは育児に積極的に参加し、父親としての役割を
果たそうとしています。しかし、自分自身の父親の存在が希薄なために、父親の役割をイ
メージしにくく、子どもが成長するにしたがって、父親としての役割を果たし難くなるこ
とが危惧される夫や、子どもに全く関心を示さず育児にも関わらない夫もいました。夫以
外では〈家族の誰かが支える育児〉から、家族のうち誰かが母親を支援し、母親達は金銭
的支援や家事のサポートなどを受けて生活している様子が語られました。このように、イン
フォーマルサポートの授受には個人差が大きく、育児の負担感、母親の家族構成や父
親の育児参加の度合いにより大きく異なっています。若年母親に対する支援が家族に回収
されているために、支援を受けられない若年母親は困難な状況で育児せざるを得ません。
その一例として、周囲が出産を望まなかった F さんは、妊娠中に不安定になった時期があ
ったといいます。本来ならば喜ばしいことである妊娠、出産を隠さなければならないこと、
家族を含め周囲に必ずしも祝福してもらえないことは、母親の心に大きな傷を残し、その
後の育児にも影響を及ぼす危険性があります。F さんは信頼できる専門職と出会い、必要な
社会資源につながる事ができたのですが、こうした家族に回収し得ない若年母親の育児
リスクは、わが国では調査が十分なされていないために、実態が明らかでなく、支援が乏
しい中で育児を行っている若年母親が潜在している可能性も否定できません。

インフォーマルサポートには個人差がありましたが、社会的支援の授受にも個人差があり
ます。〈信頼できる専門職との出会い〉で示したように、専門職と出産や育児を通して深く関
わり、社会的支援を受けることができた母親もいます。しかし〈初対面では心を開けない〉
では、若年母親は自分が希望しない時期に訪問に来た保健師を拒否し、また夫の家庭内暴力
を確認しながらも保健師は「すぐ帰った」と認識されています。若年母親は《妊娠前の社会
的特徴》から読み取れるように、これまで家族や学校での対人関係の葛藤を多かれ少なかれ
抱えているために、支援者に対しても初対面で自分の悩みや生育歴を打ち明けられるわけ
はありません。そして〈保育所に預けることへの抵抗〉や〈必要以上に他人を頼らない〉と
いったカテゴリーからも、若年母親がなるべく人の手を借りずに、自分自身で子育てをした
いという思いが読み取れます。子育てを自立して行いたいという意欲は評価されるべきで
すが、こうした意欲は、ともすると支援の入りにくさにつながる可能性があります。

若年母親に関わってきた支援者は、継続した深い関わりと、母親の子育てを認めることで信
頼関係を築くことができていました。若年母親達は「保健センター」にではなく、「保健センタ
ーの Z さん」だからこそ心を開くのです。もし支援者が、若年母親特有の文化を理解しようと
する姿勢を持たず、案件により何人もの支援者と入れ替わり対応するようなことが重なれば、
若年母親と関係を構築することはますます困難になるでしょう。個人対個人では関係が構築し
にくいといった特徴を持つ若年母親に対しては、母親が心を開いた支援者とともに訪問したり、

夫や祖父母が同席できる時間に訪問したり、個別だけでなく集団での支援を取り入れるなど、まず集団や家族として関わることで関係を構築し、個別支援につなげていくことが必要です。

出産後の社会的不利な状況に対峙するのは、インフォーマルサポート、社会的支援と若年母親自身の努力でした。若年母親達にとって、妊娠はこれまでの生活を一変させる機会となっています。〈若者らしい生活ができない〉ことへの後悔はありますが、子どもの将来を考えることにより、〈生活習慣を変える〉ことや、〈生活設計を立てる〉ことができるようになります。さらに〈母親として生きることに自信を持つ〉ことや〈母親であり続けることの努力を評価〉できる母親もいました。若年母親達は出産し、母親となることで社会性を高め、周囲の人々との関係性を再構築することができていました。

若年母親を生む背景には、独特の環境や文化があります。母親達にとっては、先輩や友人など身近な人の多くが10代で母親になっているため、若年出産は決して特別なことではなくごく自然なことであり、〈10代での出産は早くない〉ととらえている母親もいました。

ほとんどの若年母親達は、友人とのつながりがあり、近隣の若年母親についてよく把握しています。さらに、インターネットなどのメディアを通して積極的に交友関係を広げ〈横のつながりを作り出す力〉を持っています。出産後の社会的不利が顕在化する中で、若年母親同士のピアサポートは、若者らしく母親としていられる場を地域で作ることができ、母親として友人関係を構築していくことができる場となっています。そして、ピアサポートとつながることにより自身の世界を広げ、様々な人々と関わるきっかけとなっていました。

本研究では、子どもの月齢が低く、育児サークル等に参加していた母親が少なかったため、若年母親同士の横のつながりやサークルの意義について十分に検討することができませんでした。その内容については、次号以降で記述していきたいと思います。

インタビューデータの限定

本稿でインタビューした事例は、積極的にインタビューに参加し、自分の意見が役に立つなら、と語ってくれた方達です。そのため、若年母親の中でも積極性があり、出産するという選択を前向きにとらえている人が対象となっていることは否めません。しかし、若年母親が主体的に出産を選択し、夫や家族を巻き込み出産への意志を貫いている過程と、その背景にある社会的に不利な状況について記述することができたと考えます。

おわりに

本号では、若年出産の背景について考察しました。次号では、若年母親同士のピアサポートが育児にどのような影響を及ぼしているのか、若年母親グループにおけるインタビュー内容から考察していきたいと思います。

*プライバシー保護のため、データを一部改変しています。